

2017年度 マーストリヒト大学交換留学成果報告書

2017年8月26日から2018年2月3日まで、一橋大学国際・公共政策大学院の協定校であるオランダ・マーストリヒト大学への留学を行った。以下にその成果を報告する。

1. 目標

マーストリヒト大学では、Arts and Social Sciences 学部に設置されている European Studies 修士プログラムにおいてヨーロッパの戦後の国際関係や地域統合について学んだ。私は学部時代より東アジアにおける歴史問題が同地域における地域協力に与える影響について研究しており、この研究関心から発展させ、東アジアにおける政治協力・地域統合の可能性についての研究を進めるにあたり、留学においては第二次世界大戦以降、地域内の政治協力・統合を推し進めてきた経験を持つヨーロッパから有効な洞察を得ることを目標とした。

2. 履修内容

具体的には、プログラム内に設けられている三つの専攻のうち、“Europe in a Globalizing World”を選択し、以下の授業を履修した。

まず、2017年9月から“Post-War Europe. Political and Societal Transformations”を履修し、ヨーロッパの国々が戦後いかにして戦時中の対立を克服し、またどのような経緯で地域統合を進めてきたのかについて学んだ。中でも、フランスのドゴール大統領やイギリスのサッチャー首相、ロシアのゴルバチョフ大統領に代表されるように、個人的なリーダーシップがヨーロッパにおける国際関係において決定的な役割を果たしたとの議論は、東アジアの主要三か国において安定した長期政権を持つ各首脳の政治的決断が同地域における協力の進展に果たしうる役割について重要な示唆を投げかけているように思われ、印象的だった。

さらに、11月からは“International relations and Global Governance”を履修し、国際関係についての基本的な枠組みに対する理解を深めた。具体的には、リベラリズムやリアリズム、コンストラクティビズムといった国際関係理論を学習し、それぞれの立場からの国際政治における事象の分析を試みた。さらに、この授業では、Briefing Note という政策決定者に対して作成される個別案件に対する概要や経緯、政策提言をまとめた文書を執筆する機会があり、現状についての簡潔な説明・分析と、それに基づいた政策立案といった非常に実務

的な経験ができた。

留学中最後の履修となる 2018 年 1 月からの”Comparative Regionalism”においては、EU だけでなく、世界の各地域における地域統合の取り組みについて学んだ。東南アジアにおける ASEAN やアフリカの AU など、様々な歴史的・政治的・文化的背景を持つさまざまな地域協力・統合プロジェクトの比較検討を通して、地域によって異なる地域統合進展の要因について理解を深めたことで、EU 型の地域統合をあらゆる地域における協力プロセスの理想形として固定するのではない、多角的な分析視野を養うことができた。

上記のそれぞれの授業は、いずれも大人数でのレクチャーとそれらを 10 人程度のグループで分けたチュートリアルとで構成されており、毎週設定された学習テーマに沿い、レクチャーを受けた後に、レクチャーにおいて関連する文献などをベースにディスカッションを行い、テーマについての理解を深めるという形式であった。チュートリアルグループのメンバーは多彩で、オランダだけでなく、スペインやドイツ、ロシアなどから来た生徒とともに行うディスカッションは、それぞれが持つ様々な視点・背景から出る意見も多く、とても刺激的だった。同時に、メンバーの大半がヨーロッパについての学問的背景を持ち、さらに学術的な用語が飛び交う中、英語で行うディスカッションは、日常会話とは異なり、ついていくのに苦勞することも多くあった。

また、いずれの授業においても 2～3 人からなるグループを組んで執筆するグループペーパーを作成する機会があった。言語面だけでなく、意見のすり合わせや役割分担に苦勞することもあったが、それぞれが異なる背景を持ち寄って一つのレポートをまとめ上げていく中で、様々な利害関係も持ちながらも EU として政策を共有して行動するヨーロッパの姿を垣間見ることができた。

3. その他

授業内でディスカッションを行ったり、周りの学生たちと交流する中で印象深かったことの一つが、圧倒的多数の学生がヨーロッパ統合を支持し、それを維持・発展させていくうえで自分なりの確固とした意見を持ち、またその中の多くが EU にまつわる課外活動に参加し、昨今高まる EU 懐疑論に No を突き付けていたことだった。もちろん、European Studies と名付けられたプログラムに参加している学生たちであり、ドイツからの学生も、それは本プログラムに特有のことで、自分の地元においては EU の存在を日々意識して生活する人間はいないと話していたように、こうした圧倒的 EU 支持の姿勢がヨーロッパの人々を代表しているとは言えない。それでもやはり、European Studies に限らず、大学全体において多彩な国籍を持つ学生たちが交流している姿を日頃目にしたり、国境の存在を意識することなくヨーロッパ内を巡ったりすることで、ヨーロッパにおけるそれぞれの国の国民が持つ〇〇人という自意識は、アジアにおけるそれと比較すると格段に低いことが想像できた。こうした環境においては、近年日本でとみに高まる近隣諸国に対する攻撃的言説にみられ

るようなナショナリズムは醸成されにくいのではないかと考えた。

4. 終わりに

短い期間ではあったものの、協力的な周りの学生に支えられながら、日本にはできないような貴重な学びを得ることができた。マーストリヒトの地で得られたかけがえのない縁と、この機会を提供してくださった一橋大学国際・公共政策大学院、そして遠く日本から支えてくれた友人や家族に心から感謝したい。